第四講 演習問題(4)

次の文章は『たまきはる』の一節で、体調を崩していた女院に作者がお仕えしている場面から始まる。読んで設問に答えよ。

その夜より御足のあさましく冷えておはしますに、ものもおぼえず。御祈りも何事も心のままならん所にて思ふさまに申さばやと、心一つを砕けど、おほかた聞き入るる人もなし。この例ならぬ御事のはじめ、人は何とも[イ]思ひ分かざりしほどより、人候はぬ間に近く参りたれば、「や、いかがせんずる」と仰せ事ありし事のたびたびありしを、「ただ例ならぬほどは、さこそおぼえ候へ」など、[ロ]ことなきやうにのみ申ししかば、またとかく仰せらるる事もなかりし。後に思へば、いかに思しめしけるにか、また御物の気(け)などのことばにやと、かたがた[ハ]あらぬさまにも申して聞かでと、つくづくと悔しき事ぞせんかたなき。

霜月になりては、立たせおはしますことのなかりしを、ただの御美しさのせめて驚くべくもなき御気色に、人々はさらにも言はず、我が心だに、かばかりとも思ひまゐらせぬになどとおぼえて、「御前には、ゆゆしく御心劣りのせさせおはします。さまでの御事も候はぬに、[ニ]などかくえ立たせおはしまさぬ」と申ししを、六日のつとめても、御障子の御あとへ出でさせおはしますとて、やをらゐざりて御覧じ合はせて、[ホ]「心劣りの事」とてうち笑ませおはしましたりし恋しさの、ただこれほど

の事もかずかずに、いかにせんいかにせんと心を砕くことのみ尽きせぬなり。大女院の限りの宮仕へしたる身にて、手をえかけまゐらせねば、我が手をまゐらせて、「これ探らせおはしませ」とて、御手の温かさのほどを知りまゐらせんと思ひしに、七日の申（さる）の時ばかりの後は、我が身も心もなくなりにしかば、言ふかひもなし。

へいかにして思ひも出でじ見果ててしいとふべき世の憂さの限りを

注

驚くべくもなき御気色——驚く必要もない、心配する必要もないご様子。

心劣り——意気地のない、気が弱いこと。

ゐざりて——座ったままで動いて。

大女院の限りの宮仕へ——大女院は女院の母。作者が大女院の臨終の際にお仕えしていたことを指す。

手をえかけまゐらせねば——憚（はばか）りがあって直接に看病できずにいたことを指す。

問一 傍線部イ・ロ・ニを現代語に改めよ。

イ＝

ロ＝

ニ＝

問二 二重傍線部ハについて、「聞かで」とは何を聞き入れなかったのか、わかりやすく説明せよ。

問三 二重傍線部ホとあるが、誰のどのような態度であるか。その言動の意図を汲みつつ五〇字以内で説明せよ。

問四　二重傍線部へについて、何を「思ひも出でじ」というのか。具体的に三〇字以内で説明せよ。

第四講

〔模範解答〕

問一　イ　判断できなかったとき

ロ　何でもないようにばかり申し上げたので

ニ　どうしてこのように立ちなさることができないのか

問二　女院の、病気が苦しく、どうしたらよいのかと何度も訴えた言葉。

問三　女院の、作者に意気地がないと言われたので、苦しくても心配させずに気丈に振る舞おうと微笑む態度。（四十七字）

〔別解〕女院の、作者の言葉の厳しさを皮肉として言うことにより暗に示しつつ、それを笑って受け入れる態度。（四十七字）

問四　お仕えする方たちの死という無常な世のこのうえないつらいこと。（三十字）

〔現代語訳〕

その夜から（女院の）御足が驚きあきれるほど冷えていらっしゃるので、どうしてよいかわからない。お祈りも何事も思い通りであるところで思うように申し上げたいと、（自分の）心一つを痛めるが、（病状を深刻に思わないため）まったく聞き入れる人もいない。この病気である御事のはじめ、人は何とも判断できなかったときから、人が伺候しない間に（私が）近く参上したところ、「ああ、どうしたらよいのか」と（女院の）お言葉があったことがたびたびあったが、（私が）「ただ病気のときは、そのように思うのです」などと、何でもないようにばかり申し上げたので、（女院は）再びあれこれおっしゃることもなかった。後で思うと、（女院は）どれほど（つらく）思いなさったであろうか、また御物の怪などの言葉であろうかと、あれこれ別事のように（紛らし）申し上げて（女院の言葉を）聞かないでと、ひたすらに悔やまれることはどうしようもない。

十一月になっては、（女院は）立ちなさることがなかったが、いつもの美しさでひどく心配する必要もないご様子に、人々

は言うまでもなく、私の心さえ、これほど〔＝立てないほど病気が重い〕とも思い申し上げないのになどと思われて、「御前におかれては、ひどく御意気地がなくていらっしゃる。それほどの御事もございませんのに、どうしてこのように立ちなさることができないのか」と申し上げたところ、六日の早朝も、（女院は）御障子のお後ろへお出でになるということで、そろそろと座ったまま動いて（私と）視線を合わせて、「意気地がないこと」と言って笑いなさった恋しさが、ただこれほどのことでもあれこれ、どうしようかどうしようかと心を痛めて悩むことばかりが尽きないのである。（私は）大女院〔＝女院の母〕の臨終の際にお仕えしていた身で、憚りがあって直接に看病し申し上げることができないので、私の手を（女院に）差し出し申し上げて、「これを探りなさいませ」と言って、御手の温かさの具合を知り申し上げようと思ったが、七日の申のとき〔＝午後四時頃〕ぐらいの後（に崩御したとき）は、私の身も心もなくなってしまったので、どうしようもない。

いかにして…＝なんとかして（お仕えする方たちの死を）思い出すまい。見尽くしてしまった、厭うべきこの世のつらさの限りを。